

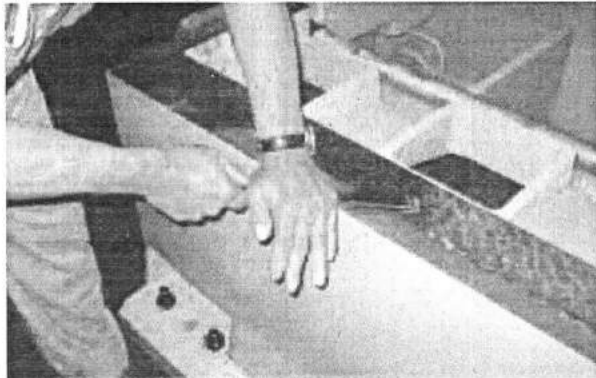
NEXT STAGE 月 開発 デザイン 火 調達 物流 水 製 造

モノづくり ④ 革新のススメ

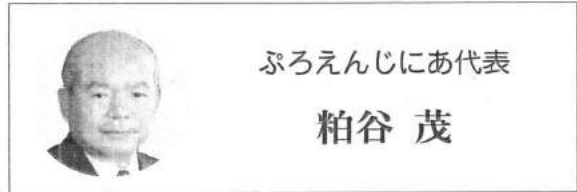
◆造形することで感性研ぎ澄ます◆

プロゴルファーの小林弘美さんに、新聞記者がインタビューで現役で長続きできる秘訣(ひけつ)を聞いていた。答えは感性を磨くこと。例えば、他のスポーツからヒントを得たり、雑巾がけなど日常雑務の一つひとつをゴルフに結び付けたりして問題意識をもち、活動している。また、普段から意識を指先に集中させ指先の感覚を鋭くすることで、パッティングの感覚を磨いているとのこと。

広辞苑によれば感性とは、①外界の刺激に応じて感覚・知覚を生ずる感覚器官の感受性②感覚によって呼



モノづくり技術者には、知識やスキル以外の何かが求められている (キサゲ加工)



ぶろえんじにあ代表

粕谷 茂

び起こされ、それに支配される体験内容などと定義されている。感性をモノづくりに取り入れる感性工学が、多くの大学で教えられるようになってきた。これは、おもてなし文化をもつ日本の強みなのだ。「〇〇のようなモノが欲しい」というお客さまニーズに、どう感動させられるか。

筆者が入社した企業では、自律性を重視した2年間のモノづくり実習があった。内容は、機械系の基礎技術を中心に、ヤスリ掛け、熱処理、キサゲ加工、板金、精密測定、旋削、フライス、研削、仕上げ、NC加工などだ。教えられたのは、安全教育、機械の操作方法、加工の基本だけで、自身で気づき、そこから何かをつかまなければならぬ。知識やスキル習得が目的ではない。実務を経験して分かったことだが、技術者の感性そのものを鍛えていたのだ。

今や、モノづくり技術者には、知識やスキル以外の何かが求められている。ハードウェア製品の機能や価格競争で疲弊し、デザイン訴求へ戦略転換する企業も多い。筆者が10年前から教鞭(きょうべん)をとる大学のモノづくり講座では、マーケティング、QFD(品質機能展開)、TRIZ(発明的問題解決法)などのスキルだけでなく、製品開発を実践しながら、造形的デザイン性も含めて魅力的仕様を追求する。モノゴトに好奇心を持ち、どうしてそうなるのかを考え抜き、造形することで感性を体得するのだ。

デザイン含め魅力的仕様を追求